

彙報

一九九〇年度

東海大学文明学会大会

一九九〇年十月二十六日、東海大学湘南校舎十一号館二〇六教室において、第九回大会が開催された。まず総会において会計報告および活動報告が行われ、それぞれ承認された。大学院生による研究発表の後、上智大学教授尾原悟先生による特別講演が行われた。十六世紀〜一七世紀にかけての貴重なキリシタン版をスライドで紹介しながら、当時の日本が西欧社会にどのように紹介されていたのか、また、日本がどのように西欧社会を見ていたのかなど、約二時間にわたって御講演頂いた。文学部教職員をはじめ多くの学生が参加し、終了後、松前会館にて懇親会が行われた。

研究発表

現代科学における意識と精神——心身論の現代的展開——

東海大学大学院 博士課程 保田道雄

特別講演

天正遣欧使節にみる日本と西欧との出会い

上智大学教授 尾原 悟氏

一九九〇年度

東海大学文学部文明学科秀作卒論発表会

一九九〇年六月二十六日、東海大学湘南校舎松前記念館において、第七回秀作卒論発表会が開催され、一九八九年度に文学部各課程に提出された卒業論文の中で、最も優秀な論文の発表が行われた。

日本課程

藤永貴子

「和様に表される特徴とそこに潜む精神」

東アジア課程

鈴木洋一

「蜀のおかれた状況——中原文化から楚文化へ——」

南アジア課程

佐藤雅洋

「バガヴァッド・ギーターに見る精神分裂症とその可能性」

西アジア課程

川又直美

「アリーダシュティのサーデー論」

東欧課程

佃 秀樹

「チエコ独立運動——マサリクの海外に於ける活動——」

西欧課程

浜田智与

「火の起源の神話」

一九八九年度文明学会例会

十二月例会（十二月十五日）

陸路美礼（大学院文明研究専攻修士課程）

「魔女の実在と伝説」

中村直子（大学院文明研究専攻修士課程）

「アリストテレスの神について——目的因としての神——」

（訂正とお詫び）

『文明研究』第八号五十四頁下段に書かれている「十二月例会」は、「十一月例会」の誤りです。本来十一月に行われる予定であった例会が、発表者の都合により十二月に延期されたために起きた誤りでした。深くお詫び申し上げます。

一九九〇年度文明学会例会

四月例会（四月十六日）

討論会「文学と歴史学」

司会 石原綱成（大学院文明研究専攻研修員）

報告者 桑野 聡（大学院史学専攻修士課程）

本田 晋（大学院史学専攻博士課程）

五月例会（五月二十八日）

一條佳子（大学院文明研究専攻修士課程）

「フランス革命と祭り」

阿部 修（大学院文明研究専攻修士課程）

「宝船復元」

七月例会（七月九日）

竹中宏子（大学院文明研究専攻修士課程）

「エスニシティ問題からみたスペイン・アンダルシア地方の民俗文化」

中山周治（大学院文明研究専攻修士課程）

「近頃の若者ってやつは」

十月例会（十月二十九日）

テーマ：中央アンデス北部における文明の形成と発展

——一九九〇年度「シカン調査」報告——

松本亮三（文学部文学科西欧課程助教授）

「海岸と山地の文化接触と文化変化」

木村玲子（大学院文明研究専攻博士課程）

「生態系とセトルメント・パターンにみるアンデス文明の変異」

十一月例会（十二月七日）

中井正樹（大学院文明研究専攻修士課程）

「フェニリル——隠された犠牲——」

小川智子（大学院文明研究専攻修士課程）

「イブン・シーナーの「ハイイ・ブン・ヤクザン」における

東方について」

一九九〇年度文学科卒業論文題目

文明日本課程

新井 郁男 日本国技・相撲の昭和史
 石原友紀子 横溝正史の作品における民俗世界
 伊藤 文 死や生に対しての態度について——第二次世界大戦の戦争犯罪者の処刑者より——

稲垣 良一 元禄の乱に散った吉良上野介義央

岩本 千鶴 横浜生糸貿易の繁栄と衰退

植田 尚子 イロリにみる家族

遠藤 直美 鎌倉幕府の禅宗保護について

大江 裕子 東大寺大仏が造られた社会的背景

岡村 理恵 幼女連続殺人事件にみるメディア世代の転換期

奥井 光司 村落社会における修験道——北河内地方の修験道

賀川 裕 田島弥平による蚕種貿易が日本にもたらしたものの

河内 優治 経

川島 靖子 栃木県芳賀郡茂木町に伝わる「山内百堂念仏踊り」の考察

小林 律子 西陣織機業の確立と変遷

小柳 健二 市街再開発と商業の再編成

齋藤 敏子 絵巻物における女性の髪について

佐藤 勝明 近世相模川水運について

式田和歌子 平賀源内の国益増進論——「薬品会」と「物類品鑑」より——

品川 幸恵 昭島市域における村落組織と社会生活

渋谷 美季 宇佐・石清水・鶴岡八幡宮に於ける放生会の変遷

杉浦 和弘 米軍施設問題と都市計画——相模原市議会会議録を

読んで——

鈴木 康一 戦国大名と城郭——後北条氏康と氏政期の小田原城

高橋 隆文 人間武者小路実篤と新しき村の思想

滝田 崇 近世武士道と男色の関わりについて

田辺 晶子 南方録と山上宗二記における茶の湯と禅

田原宏一郎 これからのレコード店と再販制度

戸田 忠正 落語

中元 智也 秦野市のたばこ産業

永堀 由紀 わらべうた「かごめかごめ」についての考察

長谷川真紀 アイヌ文学における神と人間

花田 剛治 筑豊炭田における水運の発展と衰退

深澤 滋 箱根関所の通行

松本 謙 町田市にみる郊外型都市の地域問題

向井 隆哉 正月行事の祭り方とその意味

森 務 くらやみ祭り——国府総社の祭り——

森口 敬人 中世における寺院建築——東大寺と興福寺再建様式

山内利美子 近郊都市相模原の商業地の変遷と消費者行動
山根千香子 空也と一遍の念仏

吉田 耕三 神田川今昔

吉本 茂樹 稲作生産調整下の干拓地農業

若村 泰弘 湯殿山系のミイラ

渡辺 和彦 塩の道——千国街道——

和田 健 近世期の大阪地域の発達——重要な三要因——

江原 健彦 庭

小田 拓志 漁法がおよぼす社会影響

樋口 雅之 明治・大正期における淀川右岸の治水と利水

飯塚 美帆 武將上杉謙信とその僧侶的性格

伊藤 孝明 瓦版に見る地震と鯨の關係

井上香奈子 祭りの構造と変化——妙高山関山神社「火祭り」の事
例から——

岩山 義昭 蒙古襲来絵詞における武士と蒙古軍兵士の裝備の
比較

内山 和男 利根運河の建設と運営

及川 愛 横浜水道と衛生問題

岡本 和樹 現代に伝わる霊についての民間伝承

荻原 武彦 塩山市における果樹農業

加藤久美子 元禄町人の人生観と「才覚」

菊地 則男 祭りのところ

小林 由美 古代の女性像

小宮山修平 新選組「局中法度法」の必要性とその成立
斎藤 幸滋 大都市のゴミ問題

坂田理都子 平塚らいてうにおける恋愛の変遷と女性の自立

佐藤 智幸 日本固有の衣服

下谷晴一郎 現代社会における『御伽草子』と昔話

柴崎 淳子 寛永期の鎌倉——沢庵宗彭の「鎌倉順礼記」を巡って

清水 哲彦 中世山城国山崎の交通及び油座の発展

杉田麻里子 『葉隠』と武士道

高野 美玲 葬制の変化と概念の形成

滝口 純子 江戸ッ子と膝栗毛

竹石伊万里 西周『百一新論』における儒教批判の真相

立花 和博 文化としての異端児

田中 亜紀 東西の茶文化における比較論

田沼 宏和 赤穂四十六士に存在した主従關係の思想とその特
殊性について——大石内蔵助と堀部安兵衛——

手塚 勇一 武家政権創始者としての源頼朝

富永 尚之 戸塚宿の成立

中野 朋子 鎌倉の庚申——さるの信仰——

中脇 和俊 元禄文化——町人達の始末の商——

成田 昌平 豊かさどドラッグ

服部みはる 神奈川県藤野町周辺の平安時代遺跡——その出現と
性格に関する一考察——

東原 有子 惣五郎伝承に見られる伝承の意図・歴史的意義に

ついで

丸井圭二郎 現代文明における食料危機

茂木 邦子 緑の都市景観——東京の保存樹——

森 祐子 番匠——職人尺絵を中心として——

矢野 浩紀 湘南海岸における海浜リゾート開発

吉田 郷子 宝塚歌劇の歴史

和気 孝之 輪中について——輪中地帯の都市化と輪中堤の撤去——

渡辺 直展 戦国期における津久井城の役割

ガラミザデ 日本とイランの「結婚」の比較

ハミド・セデギ・マソッド 日本とイランの教育の比較

小松 寛紀 『講孟余話』とそれへの山県太華の評語から見た

吉田松陰の思想の研究

新通 弘二 横浜港の発展とヨットハーバー

文明東アジア課程

浅羽伸太郎 三一独立運動に於ける日本の弾圧活動——水原・

安地地方の特別検査班の行動を中心にして——

諫山 桜子 中国の「一人っ子」教育に関する一試論

石井万里子 秦漢時代における儒墨の再評価

上村 重人 毛沢東思想と文化大革命

上村 朋子 二・二八事件評価にみる台湾人の意識

大塚 照之 古代南越王国「和集百越」策周辺に就いての一小

考

小野 悦子 五行説に関する一考察——『呂氏春秋』應同篇につい

て——

金子まゆみ 前漢後期の政治思想について——特に宣帝期を中心

として——

工藤 淑子 前漢の災異思想について——帝紀を中心とした考察

工藤 綾子 齊の桓公・管仲伝説の変遷について

合津純一郎 香港における人材流出の出現とその影響

佐藤利都子 中国古代における楽の思想とその変容——儒・墨・

道を中心として——

高田 省吾 中国の教育改革の課題と展望

高橋 昭雄 中国古代における都城の経緯について——秦咸陽

城から前漢長安城まで——

高橋 功二 中国の都市における老人扶養の実状と政策

滝本 佳代 漢の高祖の皇帝観——周と漢の受命の比較による——

田村 優子 秦における儒学の影響

知野 二郎 呂運亨——解放後の政治活動——

中居 公成 日本新聞報道に視る西太后

中谷 靖彦 古代における中国と日本の食文化考

行方 良 人民解放軍と毛沢東軍事思想——毛沢東軍事思想の

存亡——

八崎まゆみ 容閔と中国最初のアメリカ留学生——洋務運動とい

う時代背景の中で——

初岡 秀高 台湾女子プロゴルフ界——精神的強さの理由——

服部 毅 中英交渉期の香港における日系企業の投資動向

——製造業を中心に——

福田 隆之 タイの教育行政の諸問題

藤井 義徳 元代紙幣制度の採用について——人民に与えた影響

藤巻 陽介 二〇世紀初頭における朝鮮愛国啓蒙運動の一考察

——尹孝定の近代ナショナリズム

藤本 崇子 流血で終った民主化運動

丸山 守 前漢期に於ける烏孫の変遷

三上 元久 中国の対カンボジア政策——一九八八年からの変化

とその動機の検討——

吉田 慈人 現代中国映画考——陳凱歌——

渡邊さおり 康有为の皇帝観とその思想

渡辺 裕介 一九六〇年代中国における下放の政策的展開とそ

の意義

小林 彰 「荘子」斎物論篇について

深野 一樹 学校教育における体育の扱われ方

柳井幸次郎 朝鮮相撲——日本の相撲のルーツは「シルム」にある

小川 光洋 ラーメンのルーツをたどる

林 嘉文 広東抗英運動における反官的傾向について

根田 夕子 張学良の中のナショナリズムと抗日意識

後藤 康樹 吉田松陰の中国観

仲澤 弘矢 関東大震災時に於ける朝鮮人虐殺事件——山梨県

内の新聞報道を中心に——

東山 晋 一九〇〇年の清国における公使館員殺人事件につ

いて

文明南アジア課程

秋田 真 印・パ対立の歴史的変遷

天沼 佳恵 インドの説話の伝播とその変容

安斎 嘉子 タゴールの描いた女性像

石田 耕平 説話の変遷にみる民族性

井出 康子 ブッダの伝記および教義にみられる自己中心性

井上由紀子 インド映画界からみた女性問題

大根田幸枝 不可触民問題へのアプローチ——ガンディーとアン

ベードカル——

菊地真由美 サリール——世界への広がり——

久留宮智仁 異端者デーヴァダッタの救済

小林 誠司 現代インド社会における中間カースト

清水 薫 インド憲法とB.R.アンベードカル

白石 隆典 一九六〇年代から一九七〇年代のミュージシャン

とインド

鈴木 秀之 ネルシーの外交政策

須田 健 仏教説話に見られる過剰な布施

田中 誠太 アジア大会とインドのスポーツ

塚本 朱美 パラモンとヒンドゥー教から仏教に取り入れられた神々と仏教における意味

鳥井 満 アジヤンター壁画における描写形式

——アジヤンター壁画とサンスクリッド絵画論——

原 健一郎 インドの酒文化

原 仁美 インドにおける食文化——西アジアの食文化との比較を通じて——

盛島 庸子 西洋人からみた東洋思想——近代神智学の創始者ラヴアツキー夫人をもとに——

山田 和代 インドにおけるマザー・テレサの活動とその意義

市川 茂尚 インドにおける紅茶文化

東郷 修司 ビートルズとインド

塩見 佳則 インド文化の根源

高橋 陽二 インドのテニス

文明西アジア課程

飯高 英司 伝統的イラン音楽の近代化について

大塚 浩二 イランの古代身体鍛練法

加藤千恵子 トルコの農村師学校 *Koy Enstitusu* について

北山佐代子 ハトホル女神

小島 直美 ナスレドディン・ホジャ物語について

坂元 直子 回教圏研究所——昭和一〇年代の日本におけるイスラム研究——

薩美 容子 古代エジプトにおける王位継承に関する祭祀

杉本 守 中東の乾燥地帯の水利用

丹内 雄一 インティファード

中村 智寿 聖者と民衆のパラカ願望——現代エジプトの聖者信仰現象の諸事例から——

中村 裕子 トルコ共和国におけるパン・トルコ主義

——アルプアルスラン・テュルクケシュの思想と活動——

橋 優 一九七〇年代におけるエジプトの門戸開放政策

引田 幸子 一八〇—一九世紀オスマン帝国における女性の衣裳——宮廷の女性を中心に——

比留川あゆみムシャッター宮殿にみる初期イスラームの装飾文様

福嶋 律文 一六世紀オスマン帝国の建築家ミマル・スイナンについて

藤間 陽子 『統治の書』にみるニザーム・アルムルクの帝王観について

三上 真里 サウジアラビアにおけるベドウィンの現状

山口実紀子 サードク・ヘダーヤトの死についての考察

武田 和久 イランの遊戯と野球の比較

細川 知宏 パフラビィー朝のレザール・シャハ

高瀬 一彰 第三次中東戦争以後のバレスチナ・アラブ人の抵抗活動

抗活動

竹之内博康 ナムワ・ケマルの『祖国』について

文明東欧課程

阿部英理子 アルフォンス・ミュンシャ——作品とその評価——

伊藤 良徳 東欧諸国のニューシネマについて——歴史と今後について(ソビエト映画とA・ワイダから——)

乾 直人 ソ連東欧の環境保護運動と世界の動き

江平 優子 ブルガリア解放運動

勝又 桂子 ゲルツェン——周辺文明圏のインテリゲンツィアの

思索

木村 則子 言語からみたチェコの絵本とその芸術性

倉部 妙子 姉妹都市——川崎とリニカの場合——

子安 千夏 「音の魔術師」リムスキー・コルサコフ——その生涯と音楽

生涯と音楽

佐々木和子 ピョートル大帝の西欧諸国探訪とその影響

佐藤 美加 「ワルンヤワ蜂起一九四四」——ポーランド系ユダヤ人の立場から——

澤田 幸子 チェーホフとモスクワ芸術座

篠原 万季 ユーゴスラビアから日本への航空機乗り入れの展望

望

渋谷 珠加 アドリア海の真珠・ドゥブロボニク

菅谷 正則 南方時代のプーシキンについて

高橋 政志 政治家プーリーンの敗北

高橋美樹江 キエフ・ロシアにおけるキリスト教国教化

田所 隆之 「新しい思考」による外交政策——国内改革のための国際環境整備——

の国際環境整備

田中 克枝 排除の対象としてのシャーマニズム

津田 知子 第四回十字軍によるビザンツ帝国の滅亡——その歴史背景と諸要因——

歴史背景と諸要因

土谷 佳代 モンゴル帝国支配下におけるロシア教会

手塚 里香 カレル・チャペック——その作品と思想——

徳永 志乃 「パンと塩」の儀礼を通してみるロシアの祝祭典

西岡 真哉 スロヴェニアの民族問題

羽田 直美 *Dina Jubelka* に見る国家意識と統一

平根 真理 ラスプーチン——権力の掌握と専制政治

深澤 陸美 マルク・シャガール——シャガールの持つユダヤ意識について——

識について

柞山 直子 ポーランドの一九五六年——ボズナニ事件——

堀越油華子 木への信仰——ロシアの木造建築

松井 千恵 ブルガリアの教育

松任 美樹 食文化にみるブルガリア民俗

松原 久美 ステのエバン・ラディッチの農民運動

望月 雅彦 チトー大統領とバルチザン闘争

谷田部奈生 モルダヴィアにおける教会美術——ビザンティン美

術と西方の影響——

山本 正志 バルト三国の民族運動——併合までのプロセスとゴ

ルパチョフの政権下の動き——

吉田 笑子 スパイ・ゾルゲ

度会千佳子 ソビエトの社会教育について

文明西欧課程

青木 小織 一つの民族二つの国家——ドイツ統一とベルリンの

壁

池江 知彦 人間パウロの回心に関する考察

伊藤 亜希 ビールとは何か

伊藤 義子 ノンセンスの逆襲

岩井 美佳 アール・ヌーボーとアール・デコ——服飾デザイン

とラリック

岩本 正恵 中央アンデスの図像——チャビンからモチーカへ

蝦名まゆこ フランス革命期の服飾

小山内浩子 郵便制度の改革とベニーブラック

川上 晃央 モンテーニュの思索の足跡

川野 美佳 通過儀礼——古代ギリシア・ローマの人生儀礼と女性

喜内 恵子 ゴヤの「気まぐれ」

國友 恵美 一七世紀絶対王政下の芸術構成——太陽王の芸術

小湊 可菜 アフロディーテの起源

佐々木佳文 アドルフ・ヒトラー

澤原 寛 ドイツ人のしつけにみられる国民性——二つの柱

塩見 仁 フランス革命における人権

柴田 聖美 ラテン・アメリカの独立と影響

新庄 木幸 古代ギリシアにおける宇宙観

高原 良成 古代人の遺産

武雄 寿 オリエント・エクスプレス

富田 進 サッカーはいかに組織化すべきか

中村 友美 様式と秩序

長谷川恭子 強固な伝統文化——茶の湯について外国人の見聞

東原 由佳 ハーブについての小研究——西欧の年中行事とハー

ブ

平本 朝子 『一八〇八年五月三日プリンシペ・ピオの銃殺』

とゴヤ

福田 修 スキーの楽しみ方——日本と西欧

藤田 優子 情報化社会における文字の役割

堀口 儀彦 公民権運動における黒人たちの影響

前田健太郎 レジスタンスの歴史

増井 弘幸 アイルランドにおける妖精伝説

宮川 知子 在日米軍基地を通して見える日米関係の一端とそ

の問題点

山口 哲 アメリカ映画史におけるアメリカン・ニューシネ

マの役割

山西 栄治 黒魔術と悪魔崇拜

山本 岳弘 ユングの見た神

吉澤 郁子 『カルメン』からみた民衆

王 美玲 ゴッホの絵画における独自の作風の形成と啓示

湯川 秀樹 ドイツの分割と統合

秋山 幸男 ポルシェ一族と自動車

葛田 剛士 カンディンスキーの色彩理論

山崎 一邦 最も美しい車

赤野 栄治 進歩思想について——コンドルセを中心として

浅野 和洋 オランダ東インド会社の衰退原因

池田 清 死の準備教育の意義について——日本国内における
必要性と方策

伊藤 靖雄 日本の食卓における食品添加物

岩下 桂子 フランス革命から見た人間精神

右近 拓也 真理論におけるデカルト哲学について

大森 彩子 ワインの聖と俗——古代ギリシャのディオニソス
信仰をめぐる

小川 景子 ギリシア・ローマ古典文学に見る怪物の存在意義
——ヘシオドスの系譜の場合

加藤由紀子 宿命の女・サロメ

川瀬 桂子 アリストテレス「詩学」第二部をめぐる笑い禁止
の理論的根拠とその危険性における考察

川原 敦子 一八世紀宮廷女性のリーダーとしての人物像

木村 大助 日米生活比較

香野 智章 ベルリンの壁

小松なほみ デューラーにとつての人体比例論

斎藤 太郎 一六・一七世紀における中国とヨーロッパの文化
交流

佐野 恵理 処女性の神話——ギリシア・ローマ神話にみられる処
女の両義性をめぐって

塩澤 祥子 アテナ・アテナ・バルテノス、パンドラ、オリ
ブのこと

志村 宜美 ヴィクトリア朝の時代精神と同性愛——ワイルド
裁判の一考察

相馬 明美 中世ドイツの民衆本の世界——賤視される人々

滝澤 祥一 東海道メカゴロポリスに関する一考察

田中 喜美 マヤ暦の文字の構成と象徴性

田邊 友美 ドイツにおける叙任権闘争

津保 恭子 ワーグナーの人間性から見る作品の普遍性

中野ひろみ ヴェルサイユの宮廷生活における貴婦人たちの服
飾

永橋 信 『快感原則の彼岸』におけるフロイトの死の本能
仮説について

野口 泰生 世界経済とEC

野原 順子 アメリカの黒人問題

早川 和也 古代ローマの市民生活

林 良穂 世紀末と裝飾芸術

広田 祐子 食と病——文化の中における食生活と病氣

福島 豊 ローマ帝国のキリスト教の広まり

福山佳代子 T・E ロレンスとアラブ——アラブから見たロレンス像をめぐる

ス像をめぐる

布留川 泰 東ドイツのスポーツはなぜ強かったか

前田 正浩 増えつつけるゴミ対策

松尾 潤 マックス・ウェーバーの合理的資本主義の立証

森川 実絵 大気汚染防止をはじめとする地球規模の環境保全について——ECの一員であるイギリスの場合

山口 圭子 フォイエルバッハの宗教観

山野辺義則 ZHS について

山本 真弓 一九世紀の子ども観の変遷

渡部 博 ナチズムの成立と民衆生活——その受容と抵抗について

加島 毅 戦場カメラマン・ロバート・キャパについて

紅谷 朋史 日本と欧米における腎臓移植の歴史と現状の比較

阿久根 圭 菓子におけるフランスと日本の国民性の違い

吉田 英俊 環境への意識の相違——欧日の車社会を考える

中田 英登 インカ王統譜再考・二重統治の検討

水野 恵介 東海大学の留学制度と留学生の意識

大学院文明研究専攻修士論文

小川 智子 イブン・シーナーの『ハイイ・ブン・ヤクザインの物語』についての考察

の物語』についての考察

中井 正樹 北欧神話におけるフェンリルの役割についての考察

察